

叱る教育と褒める教育

遠 藤 均

星槎道都大学研究紀要

経営学部

第2号

2021年

叱る教育と褒める教育

遠藤 均

要約

叱る教育法と叱らない教育法。

そのどちらが正しいのか。

この問題は、しばしば議論の俎上^{そじょう}に上ってきた。

しかし、本稿では、叱る教育法か叱らない教育法かという視座ではなく、脳科学の視点からこの問題を考究していく。

これにつづく褒める教育法においては、褒めることが、ときとして子ども（学生）を誤った方向に導いてしまうリスク（**陥穽**）について考察する。

そして、子ども（学生）の可能性を促進する褒め方と褒めることの意義について論じていく。

【序① AI と人類の未来】

シンギュラリティ（技術的特異点／technological singularity／レイ・カーツワイルが提唱）が、2045年ごろに出来ると予見されている。

そもそも、シンギュラリティとは、なにか。

AI（人工知能／artificial intelligence）などの進歩・発展によって、「これまでの世界とはまったく異なる、不連続な世界がやってくる、と予測されている」⁽⁰¹⁾ 時点である。そのとき AI は、人間の手を借りずとも、人間より賢い知能を生み出すことが可能になるという。⁽⁰²⁾

この「2045年問題」が現実のものとなり、社会が劇変したとき、私たちの生活や職業は、どのように変化するのだろうか。

これまでとは大きく異なり、今ある職業も、およそ半分が AI に取って代わられると予想されている。⁽⁰³⁻⁰⁴⁾

では、どのような分野が、置き換えられるのだろうか？

おもに、これまでの入試問題や定期試験問題のように、あらかじめ答えがあり（答えが一つしかなく）、情報処理力（速く正確に情報を処理する力／ジグソーパズル型学力 ※①）や記憶力が問われてきた領域である。そこは、人間に比して、AI が圧倒的に力を発揮する得意分野なのだから。

それでは、未来に適応し、生きぬくためには、どうすればいいのか。

端的に言えば、AI ができないこと、あるいは AI が不得手とすることができるようになることである。

それはいったいなにか。

ひとつは、答えのない問い、あるいは答えがひとつではない問題を解決することができる能力。すなわち、創

造力や想像力、思考力、表現力といった情報編集力（レゴ型学力 ※②）である。

もうひとつは、基礎的人間力（人格力、精神性、情操力）にほかならない。なぜなら、AI は、どこまで行っても AI であり、けして人間にはなれないのだから。⁽⁰³⁻⁰⁴⁾

※①ジグソーパズル型学力……ジグソーパズルにおいては、あらかじめ答えが決まっている。およそ、だれがやっても一つの答えにしかならない。それ以外の答えはすべて誤りとなる。だから、そこで問われる能力は、ジグソーパズルをいかに早く正確に組み立てるかという情報（ピース）処理力である。

※②レゴ型学力……レゴにおいては、答えがあらかじめ決まっているわけではない。それどころか、答えは無限にあるといってよいだろう。レゴ（情報）はいかようにも組み合わせることができ、新しいものを生み出すことができるのだから。ゆえに、そこで問われる能力は、レゴ（情報）を早く正確に組み立てる能力ではない。いかにレゴ（情報）を組み合わせ、これまでになかった新しい価値を創りだせるかという力である。それに必要な主な能力は、記憶力や情報処理力ではない。新しいものを生み出すことができる創造力や思考力、想像力、直観力などである。そして、この能力を身につけることが、基礎的人間力と並んで、AI に対抗しうる人間に残された生き残りの道であるといえよう。

【序② 芸術の未来】

芸術を例にとりて、基礎的人間力（人格力、精神性、情操力）について考えてみたい。

たとえば、AIは、ロゴマークのデザインといった技術的な分野において、すぐれたデザインを生み出すことができるようにすでに進化を遂げている。⁽⁰⁵⁾

巨匠の名作を模倣し、贋作を生み出すことも容易いだろう。

だが、芸術はたんなる技術ではない。

ただの技術なら、最高の技術を有する贋作者こそが、至高の芸術家ということになるだろう。

だが、贋作者を芸術家と呼ぶことはできない。

芸術家であるためにはなにかが足りないからである。

では、贋作という海市（^{かいし} 蜃気楼）に欠けているものとは、なにか。

深い感動である。

技術だけの空中樓閣では、底知れぬ感動を鑑賞者にもたらすことはむずかしい。感心させたり、酔わせたりすることは、できたとしても。

それでは、感動をもたらすものとはなにか。

作者の精神性にほかならない。

ひとり、心（精神）だけが、心に感動を与えることができる。

そして、感動の深さは、およそ作者の心情（人格、精神性、情操）の深さに比例するといえよう。

深い精神性をたたえた真の芸術こそが、私たちに深い感動をもたらしてくれる。

ただし、どれほど深い内容（精神的価値など）を有していようと……。

それを的確に表現するための技術（表現力）がなければ、絵に描いた餅になってしまう。だから、内容を伝えるために必要な技術を身につけることは、芸術にとって不可欠である。

したがって、深い精神性に、一定水準以上の技術がともなったものこそ、真の芸術に値する。

以上のように、本物の芸術は、精神性を有しないAIにとって代わられることは、ないであろう。

ひるがえって、精神的価値を欠いた芸術もどきの単なる技術は、淘汰されていくのではないだろうか。

【序③ 教育の未来】

文部科学省は、『高大接続システム改革会議』の最終報告（2016年3月31日）において、「これからの時代に向けた教育改革を進めるに当たり、身に付けるべき力として特

に重視すべき」⁽⁰⁶⁾ものとして、『学力の3要素』を掲げた。具体的には、以下のとおり。

- | |
|--|
| (1)十分な知識・技能 |
| (2)それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力等の能力 |
| (3)これらが基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度 |

『学力の3要素』は、「ゆとり」か「詰め込み」か、などと対立する議論の一つにまとめ、生徒が新しい社会を生き抜くために育てるべき「生きる力」として設定されたものでもある。

本学において、私が担当する主要な講義※においても、以上を踏まえ、アクティブラーニングの一環として、グループワークやディスカッション、ディベート、構成的グループエンカウンター、Q&Aなどを積極的に導入してきた。

つぎに、私の専門ゼミにおける取組について、端的に述べたい。

※哲学入門、倫理学入門、哲学概論、倫理学概論、ビジネス倫理、道徳教育の指導法など

【序④ 「専門ゼミ」における取組】

私のゼミでは、学生が、興味あるテーマをみずから見つけ、調べ、発表し、そして全員で話し合っ、深掘りしていく。

ただし、4年次からは、テーマは、各自の卒論に沿った内容に移行していくことになる。

この方法を採用する理由は、これまで述べてきたことにとどまらない。

学生ひとりひとりが主役（教師）となり、自発的に学んだことをわかりやすく伝え、共に考え、大いに楽しむことこそ、最高の学習法であるからでもある。また、このような協働を通し、基礎的人間力をも磨いていくことができよう。

事実、ゼミ生は、回を追うごとに、学ぶことや発表することの楽しさ等を体得し、表現力やコミュニケーション力を格段に高めていっている。

この取組は、入社試験における面接や、入社後のコミュニケーションなどにおいても、大いに役立つにちがいない。

つぎに、教職科目である「道徳教育の指導法」につい

て、簡潔に述べていく。

【序⑤ 「道徳教育の指導法」における取組】

「道徳教育の指導法」において、Q&A はもとより、構成的グループエンカウンターやディベートなども導入している。

ここでは、ディベートについてのみ述べていきたい。

今期をふくめ、3期にわたり、「叱る教育か、褒める教育か」というテーマでディベートを行ってきた。

まず、学生には、叱る教育の実践例と褒める教育の実践例をいくつか紹介し、それらが現場においてどのように機能しているかを学んだ。

つぎに、学生を、叱る教育肯定グループと褒める教育肯定グループの二つに分け、作戦会議を行ってもらう。

そして、ディベートにおいて、ルールに則り、議論を展開してもらった。

けっかは、教育方針に対する理解を深め、強い問題意識を抱き、議論を大いに楽しむこととなる。

最後に、総合的に深い理解に到達するよう、叱る教育と褒める教育について、Q&A をふくむ講義を行った。

これらのプロセスは、彼らが教師になったとき、必ずや生徒指導に生きてくるにちがいない。

以下の本論は、「叱る教育」と「褒める教育」についての、私の考えを述べたものである。

【「叱る」の定義】

「叱る」という言葉の意味は、使う人によって、温度差（意味の相違）があるように思われる。

そうであるとすれば、「叱る」について議論してもかみ合うはずがない。

つぎの表は、怒りの度合いによって、「叱る」行為を分類したものである。

0%	25%	50%	75%	100%
注意とすすめる	説教しめる	叱る	叱り飛ばす	叱咤罵る

本稿では、「叱る」という言葉を、「注意する」と「怒罵る（叱罵する）」の中間程度の意味で用いる。

【叱る教育は間違い？】

叱る教育法は誤りであろうか。

これを、脳科学的観点、とりわけ「報酬系と罰系」から紐解いてみよう。すなわち、「叱ることが報酬系を刺激するか否か」という視点から検討してみたい。

報酬系は、脳幹の中央部にある神経細胞の領域（※A10 神経核）にある。この神経核が刺激を受けると、神経ホルモン（神経伝達物質）であるオピオイドやドーパミンが分泌され、快を感じたり、やる気が起きたりする。

そればかりではない。

近年の研究では、思考力や記憶力、そして運動能力をも向上させることが突きとめられた。(07)

いっぽう、罰系は、視床下部などにある神経細胞の領域（※A6 神経核など）にある。この神経が刺激を受けると、ノルアドレナリンなどの神経伝達物質が分泌され、不快（苦痛）を感じたり、不快な感情が生じたりしてしまう。

また、報酬系や罰系への刺激は、健康と密接な関係がある。

私たちは、日常的に、さまざまなウイルスや細菌といった病原体にさらされていることは言うまでもない。にもかかわらず、必ずしも感染するわけではないのはなぜか。罹患しないとすれば、それは、免疫細胞が私たちを守ってくれているからなのである。

免疫細胞のなかでも、もっとも強力な N K 細胞は、報酬系が刺激されると活性度が高まり、逆に、罰系が刺激されると活性度が低下してしまう。

さらに、報酬系への刺激は、副交感神経の働きを活発にして緊張を解き、罰系への刺激は、交感神経の働きを活発にして緊張をもたらす。

たしかに、健康のためには、交感神経と副交感神経とのバランスがとれ、メリハリの効いた生活を送ることが大切である。

けれども、ストレスが多く、交感神経が過剰に刺激されがちな現代においては、日ごろから報酬系を刺激し、副交感神経を活性化しようと心がけることが望ましい。(08)

報酬系を刺激するのか、罰系を刺激するのか。

これは、五感(※視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚)による快・不快によって、じかに決定されるわけではない。扁桃体をとおして送られた快・不快の情報は、最終的に大脳皮質によって判断され、どちらが刺激されるかが決まる。

たとえば、まずい青汁を飲んで感覚的には「不快」であったとしても、大脳皮質が「身体によい」と価値判断すれば、結果として報酬系が刺激される。

逆に、大好きな音楽を聴いて、感覚的には「快」であったとしても、必ずしも報酬系が刺激されるわけではない。試験(受験)前で、「音楽を聴いているばあいではない」などと自覚していれば(価値判断していれば)、結果として罰系が刺激されるという。(08)

五感(視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚)における快・不快	⇒	大脳皮質による価値判断	⇒	報酬系刺激 or 罰系刺激
----------------------------	---	-------------	---	---------------

つまり、叱られたとしても、大脳皮質がそれを「よい」と判断すれば、罰系ではなく報酬系が刺激されるのである。それが肉体的に不快(苦痛)を与える体罰をとまなうとしても。

このように、叱ることが、罰系ではなく報酬系を刺激するならば、叱ることも、ときには有効な教育法となりうるだろう。

問題は、叱るか叱らないか、ではない。

叱ることが、報酬系を刺激するのか、それとも罰系を刺激するのか、ということなのである。

別言すれば、たとえ叱ったとしても、罰系ではなく報酬系を刺激するならば、叱ることも有効な教育法となりうるにちがいない。

それでは、叱ることが、報酬系を刺激する条件とはなにか。

もっとも重要なのは、後述するように、叱る側が、深く大きな愛情をいだいていること。そして、両者の間に、あらかじめ強い信頼関係が築かれていることである。

親子や兄弟、夫婦、親族といった間柄であれば、比較的、この条件を満たしやすい。

教師と生徒といった関係ではどうか。

親子関係などに比べ、なかなかハードルが高い。親交(深交)の累積時間が相対的にすくなく、両者の結びつきに必然性があるとは言いがたいからである。

しかしながら、そうであろうと、以下の条件を満たせば、叱ることによって、罰系を刺激することなく、報酬系を刺激することが可能となろう。

①教師が生徒に深い愛情をもち、強い信頼関係を構築していること。換言すれば、相手との良好な人間関係が成立していることが前提となる。親交の累積時間の少なさ(量)を、質によって補うるほどに。

「学級崩壊立て直し請負人」・小学校教師・菊池省三先生は、子どもたちの力でまっすぐ成長の道に行くことはないと考えている。だから、叱るのだという。ただし、菊池先生は、その前提として、信頼関係を築くことに力を注ぐ。

その一つの方法が、「成長ノート」※。もう一つは、後述する「ほめ言葉のシャワー」である。

※成長ノート……子どもが、みずからの成長を自覚できるよう、先生と一対一で対話するためのノートである。子どもたちは、毎日のように、与えられたテーマについて思いの丈を書く。あるいは、抱えていた気持ちを吐きだす。たほう、先生は、これに長文のコメントを書いて返却する。菊池先生は、この作業に、休みの日に10時間も費やすという。

(09・10)

②本気で気にかけてくれている(心配してくれている)ことが、きちんと伝わっていることが大切である。

③つね日頃から、生徒を積極的にほめていること。ほめることをせず、叱るばかりでは、自信(自己価値観)を崩壊させてしまう恐れがあるのだから。

④叱られている相手は、叱られることに納得しているとはかぎらない。だから、叱るさいは、そのわけをはっきりと理解させ、相応のあやまちを犯したのだという自覚をもたせる必要がある。そのうえで、問題点を改善すれば、より良くなれるのだということを理解させ、希望をもたせることが欠かせない。

菊池省三先生も、叱るさい、注意深く生徒に理由をきちんと説明し、納得させている。

⑤叱る動機が、そのときの気分や怒り(憎しみ・私憤・私怨)、劣等感の補償、ストレスの発散といった類であっていいはずがない。深く愛に根ざしている必要がある。こんな動機で叱れば、怒りは怒りを誘引し、憎しみは憎しみを誘うだけだろう。

- ⑥言葉で相手を説得することができないとき、その代用として、叱責しっせきを用いてはならない。そのとき言葉の暴力となる恐れがある。それは、夫婦げんかなどのさい、言葉で相手を説得できないために、暴力をふるったり、包丁をつきつけたりすることに近い。しかも、相手が納得していない状態で、言葉の暴力により、頭ごなしに命令服従させようとすることは、多大な悪影響をおよぼす。たとえば、相手から主体性や自発性、積極性を奪い、受動的（消極的、傍観者の）人間にしてしまう。別言すれば、アメとムチでしか動かない人間にないやすい。また、叱られた相手も、言葉で説得できないとき、安易に叱る人間になる恐れがある。
- ⑦ほかの誰かと比較して叱ってはいけない。誰かと比べてしまうと、嫉妬や反感などにより、メッセージがあらぬ方向に向かってしまい、逆効果となる恐れがある。
- ⑧相手が、なぜそのような言動におよんだのか？その理由を事前にきちんと確認し、相手の置かれた立場や事情、価値観、考え方などを理解したうえで叱ること。
- ⑨相手の個性や時代的背景を見極めて、臨機応変りんきおうへんにおこなう。
 今の子どもたちは、叱られた経験とぼに乏しい。そのため、叱られること自体に拒絶反応を示したり、パニックを起こしたりする危険性がある。その恐れのある子どもを叱るさいには細心さいしんの注意をはらうこと。
 たとえていえば、ことわざの「桜切るばか、梅切らぬばか」。
 梅は枝を切るほど活力を増す。
 が、桜は活力を弱めてしまう。
 だから、相手が、叱られてへたってしまう桜なのか、それともよりよく生長する梅なのかを慎重に見極めなければならない。
 また、教師の社会的地位も、時代により大きく変動する。叱ったとき、その地位や信望が低いほど、生徒のみならず親御さんからも、反発が大きくなりやすい。
- ⑩叱るタイミングを外さないこと。また、叱った後にそれを引きずってはならない。世阿弥ぜあみの言葉では、時を見極め、ことに当たる「時節感当じせつかんとう」に相当しよう。

- ⑪人前で叱って、恥をかかせないよう配慮する。
 叱ることと、恥をかかせることは、まったくの別物。恥をかかせることは、罰系を刺激し、自己価値観いちじるを著しく低下させることにつながるであろう。
- ⑫叱る対象は、生徒の「ある時ある場所での特定の言動」である。けして、「人格や能力そのもの」であってはならない。
 感情が高ぶるにつれ、部分否定がどんどんふくれあがっていくことがある。
 高じれば、怒りが暴発ぼうはつし、全否定にまでおよぶこともあろう。
 しかしこれでは、意に反して、叱ることが逆効果になってしまう。
 いやそれどころか、相手との人間関係をぶち壊したり、深い傷を負わせてしまったりすることさえまれではない。
 社員寮で両親を殺害した犯人（※当時 15 歳）の犯行の直接の引き金となったのは父親のつぎの一言だった。※①
 「おまえは信心が足りないから、あんなバカ学校へ行っただ。おまえは俺よりバカだ」⁽¹¹⁾
 これにより少年は、「誇りみたいなものが壊れた。恨み憎しみが爆発したような感じになって、『殺すしかない』と思った」⁽¹²⁾ という。
 また、附属池田小事件の犯人・宅間守たくままもるは、大阪教育大学付属池田中学校入学を目ざしていたとき、母親にこう言われ、受験を断念した。※②
 「絶対に受からない」
 「生まれてこなければよかった」⁽¹³⁾
 以上、二人に共通するのは、親が子どもを全否定したということである。これらの発言が、のちの犯行につながる深い傷を負わせたことは否定しがたい。

※①2005年6月20日午後4時40分頃のこと。東京都板橋区成増なりますの社員寮で爆発が起き、管理人夫妻が焼死体で見つかった。

当初、死因は焼死と思われたが、司法解剖の結果、夫（44歳）は、頭部を鉄アレイ（8kg）で強打されたうえ、首など数ヶ所を包丁で刺されて絶命ぜつめい（※死因は脳挫傷のうざしやう）。妻（42歳）は、胸部きょうぶを中心に40ヶ所以上もの刺し傷を負って失血死していたことが判明した。

犯人は殺害後、ガスホースを切断し、ガスを放出。ついで、殺虫剤のスプレー缶をのせた電熱器をタイマーで作動させ、ガス爆発を起こしたとみられる。

15歳の一人息子は、事件当日、都立工業高校を無断欠席し、行方不明になっていた。が、三日後の23日。犯行現場から150kmも離れた草津温泉の旅館で発見される。そして、そのまま殺人容疑で逮捕されたのだった。

※② 2001年6月8日、10時15分ごろのこと。

宅間守(37歳)は、大阪教育大学付属池田小学校に侵入。刃渡り15センチの出刃包丁をふり回し、逃げまどう児童につぎつぎと襲いかかった。これにより1~2年の生徒8名が死亡。教師2人をふくむ15名が受傷した。

⑬「～するな!」、 「～しなさい!」。いつもいつも、命令口調で叱ってはいは反発をまねく。「どうして～するの?」、 「～ではないの?」。ときには、こんな問いを投げかけ、相手にじっくり考えさせよう。他人から押しつけられた結論は忘れやすい。けれど、自分で出した答えは、記憶に刻まれやすいのだから。

⑭叱る条件にぶれがない。つまり、生徒(相手)間のバラツキや依怙鼻肩があると感じさせぬよう、公平無私であることが肝要。

⑮ときには、最初にほめてから叱ってみよう。そうすれば、心理的受け入れ態勢を構築することができ、メッセージが受容されやすくなるにちがいない。

また、叱って終わるのではなく、最後に、ほめたり、励ましたり、厚い信頼感や期待を伝えたりすること。しかも、必要があれば、アフターケアをおこなわないことである。

ラグビーをとおし、学校崩壊の危機に瀕していた伏見工業高校を立て直した山口良治先生は、叱った生徒を食事(お好み焼きなど)に誘ったという。僕が寒いときは、自分だけ水を飲んでまでも。山口良治先生は語る。

「私は、いつも生徒の心の痛みを思いやれる、そういう自分でなければいかんと心に誓ってきたし、それと同時に、叱った次の日に優しい語りかけをする、そういうアフターケアを心がけてきた。『こいつと一生つき合うぞ』という心意気で……」⁽¹⁴⁾ 大脳生理学の権威・久保田 競(京都大学名誉教授)もこう説く。

「子供や部下を叱る際に、ただ相手をなじるだけで終われば、相手の脳を衰えさせます。…ほめながらやる気を出させるとか、最後にほめ言葉を用

意しておいて叱るとか、ごほうびを用意してあげて何かを我慢させるとか、そういった指導を心がけてください」⁽¹⁷⁾

⑯問題が深刻でなければ、叱るとき、鬼のような形相になることは避けること。ときにはユーモアをまじえて(軽口や冗談を飛ばしながら)叱ってみよう。また、同性ならば、スキンシップを取り入れて、肩をポンとたたいたり、肩に手を乗せるのも効果的。そのほうが、好意や愛情が伝わって、相手が反発を感じず、メッセージを素直に受けとってくれる確率が大いに高まるだろう。

⑰自分に甘く、他人に厳しいのでは、叱られて当然のケースでも、反発が起きやすい。したがって、叱る側は、自分自身に対しても厳しくある必要がある。たとえば、自分が間違いを犯したならば、だれに対しても、公正かつ実直に謝罪できる器がなければならない。なお、自分の誤りに謝るためには、相応の自信と侮られない信頼関係が前提となろう。

⑱ふつう、叱責される衝撃度は、年齢が低いほど大きい。逆言すれば、大人になるほどその耐性が身についていく。そのため、大人になると、子どものころの嫌な記憶は薄れ、そのインパクトを忘れ、ついつい過剰に叱ってしまいがちである。「過ぎたるは猶及ばざるが如し」。度を越さぬよう配慮が大切である。

⑲年齢が高くなるほど、プライドや自意識が強くなる傾向にあり、それだけ叱るハードルが高くなっていく。具体的にいえば、小学生に通用した方法が、高校生や大学生に対しても効果を発揮するとはかぎらない。「人を見て法を説け」ということに留意し、相手に合った方法論を慎重に選択する必要がある。

⑳叱る側に、説得力(言葉力)や人間力がなければならない。というのは、言葉の暴力もふくめ、それらの不足によって起こりやすいものだから。本来、説得力や人間力があれば、叱る必要がないことが多い。つまり、説得力や人間力不足を補うために、もどかしくなって叱るという強硬手段にでてしまう傾向がある。そうであるなら、叱るこ

とは便宜的方策にすぎず、最善策とはなりえない。叱るよりも、叱らなくてもすむ説得力や人間力を身につけることを目指すことである。

なお、人によっては、ほめられると慢心したり、増長したりしてしまうことがある。こういうばあいは、叱ることが、ことのほか効果を発揮することもある。

あるいは、親子関係が希薄（親が子どもに無関心）で、本気で叱られたことのない問題児は、叱られることで愛情を感じ（心から心配してくれていると感じ、報酬系が刺激され）、改心するケースもすくなくない。そういう子どもは、愛されていない不満（さびしさ、悲しみ）のはけ口として、あるいは親にかまって欲しいがゆえに、非行に走っているばあいが多々あるのだから。

ただし、これはケースバイケース。諸刃の剣であることに留意する必要がある。

ゴイング 【強引愚マイウェイ】

子ども（生徒、部下）が親や教師（上司、指導者）の命令に100%従っているとすれば……。

そこに主体性（自主性、自発性）がはいりこむ余地はない。

反対に、主体的（自主的、自発的）であろうとすれば、ときには親や教師と異なる判断をくだし、命令にそむくこともありうる。

ところが、我執や支配欲が強い親や教師だと、そういう子どもの建設的不服従に、つつい怒りを爆発させてしてしまう。

それが、子どもを想ってのことであれば、まだ救われる。

けれど、その怒りのキッカケは、「命令に従わない＝あなどられ、バカにされた」という思いこみであることが少なくない。

もちろん、誤った言動に対しては、軌道修正すべきである。

しかし、親や教師が、自分の思い通りに動いてくれないという理由だけで、子どもに怒りをもつと……。

主体性や判断力、責任感、反省、活気、意欲、自発性、モチベーションなどを欠いた時代遅れのロボットになってしまう。

そしてついには、悪と知りつつも、上からの命令というだけで、おのれの良心を踏みにじる人間になってしまうことだろう。こうなると、命じられるままに、不正行為や犯罪などを忠実に実行し、社会や地球環境を踏みつぶす怪物にさえなりかねない。

北風のごとく、力で生徒をねじ伏せる教師は、いったいなにを望んでいるのだろうか？

子どもを恐怖で支配し、おのれの優越感（※劣等感の反作用【補償】としての優越感）を満足させる手段（道具）にしたいのだろうか。

それとも、犬のように従順な、「人間犬」にしたいのだろうか。

いずれにせよ、本来的教育の姿とはほど遠い。

およそ教育とは呼べない、ただの犬の調教である。否、犬のしつけとしてもけっして合格ラインには達しない。これは、盲導犬の訓練をみても明らかであろう。

たとえば……。

信号は赤！

車が迫る！！

だが、主人は「Straight（真っ直ぐに進め）」と命令を下す！！

——「命令の遵守」と「命の危険」の二者択一。

主人の命令に従うべきか、そむくべきか。

さあ、盲導犬は、どちらの「命」を選ぶのだろうか？

答えは……。

命令をあっさり、きっぱり無視する。

犬でも、主体的に状況を判断できなければ、一人前の盲導犬にはなれない。人間においては、なおさらである。

それでは、どうすれば自律的に判断をくだし、「利口な不服従」を実践できる盲導犬を育てることができるのだろうか？

訓練を通して、「命令に逆らっても褒めてもらえた」という経験をデータベースに蓄積させることだという。⁽¹⁵⁾

おのれの枠にはめること。忠実な操り人形（下僕）にすることが教育の役割ではない。

自分の頭で理非曲直をしっかりと判断し、みずからの良心にもとづいて主体的に行動できる人材を育成すること。これこそが、教育の大切な使命のひとつなのである。

だから、命令に逆らったという理由だけで頭ごなしに叱りつけるべきではない。

ばあいによっては、ほめてあげることも必要である。

自由度（許容範囲）が十分にあれば、子どもは安心して、判断力、良心、主体性、個性、創造性などを伸ばしていくことができよう。

北風ではなく南風。

教師は、強圧的な命令によってではなく、愛によってこそ水先案内人になることである。

【叱ることは多大なリスクをとまなう】

2011年10月、栃木県警足利署長が更迭された。

主たる理由は、部下をたびたび強く叱りつけたことにあるという。⁽¹⁶⁾

剛の者の集まりである警察署でさえこうである。あとは推して知るべし。

時として、叱りつけることは、パワハラやアカハラとして処罰の対象となる時代となった。

叱ることは、これ以外にも、様々なリスクをとまなう。

まず、相手の自己価値観を低下させてしまう危険性がある。

また、しこりが残るばあいが多。こちらに理があろうとも、相手もそれを頭では理解していようと。

さらに、「覆水盆に返らず」。叱ることで、これまで築きあげてきた信頼関係や親愛感に亀裂がはいり、瞬時にしぼんでしまう恐れもあるだろう。

それゆえ、叱らなくてすむのなら叱らないほうがいい。

叱責(注意)は、賞賛を際立たせる程度にとどめ、叱る状況をまねかない効果的な指導法やシステムを臨機応変に考案すべきである。

その方法は無数にあり、根気よく求めつづけさえすれば、必ずや見いだせるだろう。

【叱る原因 ①】

相手をたしなめるとき、なぜ、怒りをこめてしまうのだろう？

それには、さまざまな原因があるにちがいない。

性格が短気である。

生来、血の気が多く、怒りっぽい。

虫の居所が悪かった、などなど。

しかし、ここで注目したい原因がある。

それは、「叱る側に、相手になめられた(なめられている)」という意識が働くケースである。

たしかに、何度たしなめても同じことをくり返すとすれば、なめられていることもあるにちがいない。

だが、ひるがえって考えてみよう。

「なめられるのは、なめられる側にも問題があるからではないか」と。

また、「金持ち喧嘩せず」ということわざがあるように、たとえなめられたとしても、自信があれば怒りを感じないですむだろう。怒るのは、それによっておのれの劣等感が刺激されたり、自己価値観がゆすぶられたりするからなのである。

だから、つまらないことで怒りを感じないためにも、自分自身の愛と自己価値観を高めていく必要があろう。

【叱る原因 ②】

たとえば、親が子どもを、テストの結果がふるわなかったことを理由に叱ったとしよう。

当の親とすれば、その動機は子どもに対する愛情であると思いきこんでいるかもしれない。

しかし、なかには、親の子どもに対する期待が裏切られたと感じたことが原因となっていないだろうか。

すなわち、

- ①子どもに対する期待が裏切られたと感じ、失意やショック、ストレス、欲求不満などがつのる。
- ②それらマイナス感情を、ついつい怒りや叱責といったかたちで発散してしまう。

もしそうであるなら、それは子どもへの愛情ではない。ただの親のエゴや見栄、虚栄心、優越欲、過度の競争心である。あるいは、自分のかなえられなかった夢を、子どもを通してかなえようとする身勝手であるばあいもあるだろう。

そういう動機で子どもを叱っていないかどうか、心の奥を虚心坦懐にのぞいてみる必要がある。

【「叱る」を超えて ①】

多少なりとも、叱ることに怒りがともなう。※

だが、子ども(生徒、部下)などを注意するにさいし、怒りをこめることは、はたして効果的なのだろうか。

否である。

怒る必要はさらさらない。

それどころか、怒らないほうがずっといいのである。

だが、それでは迫力がなく、効き目が薄いと思われるかもしれない。

けれど、白紙にもどって考えてみよう。

叱る以上に、相手の胸に響かせる道があるのではないかと。

それは……。

真剣な想いや愛。

心からのほめ言葉。

相手への誠実な期待。

真実に裏打ちされた言葉の力(説得力)、などである。

しかも、これらは相手の反発をひき起こすことはほとんどない。

それどころか、親愛や尊敬、感謝、やる気といったプラスの感情を呼び起こす。

そして、すべての人にとって、無限の好循環をもたらすことだろう。

逆のパターンならどうなるか。

シンガー・ソングライターのさだまさしはこう語る。

「世の中は《減点法》が主流。学校の入試、会社の採用試験、出世レース、あれも、これもだ。

こうなると『褒められる』ことより、『ミスを犯さない』ことが最も大切になってしまう。

『ミス』にばかり目が行くようになるとお互いの視線は意地悪になり、心は温度を失い、ますます人は人を褒めなくなり、褒められないから人は人に『感謝』しなくなり、と心は悪循環をきたす」⁽¹⁷⁾

【「叱る」を超えて ②】

叱るということは、相手の自己価値観に否定的烙印を押し、それをおとしめてしまう恐れがある。

好ましからざることに對し、叱ることで善悪を認識させ、自分が悪かったと自覚させるにとどまてはいけな。これではその点は是正できたとしても、あらたな問題をつぎつぎと発生させるであろう。これでは元も子もない。

大切なのは、叱った相手が、それを契機として、よりよい自己価値観をもてる方向に導くことなのである。

つぎに、「褒める教育」について考察したい。

【ほめることは努力を呼び起こす】

小学生無差別殺傷事件（附属池田小事件）の犯人・宅間守は、エリートになることにあこがれていた。

ところが、彼には決定的に欠けていたものがある。

夢を実現するための努力が。

なぜなのか。

精神科医の片田珠美（京都大学非常勤講師）は、こう説く。

「一つには、宅間の生い立ちにおいて、根気よく努力していくことで困難を克服する、そして、そのことで親にほめてもらう、というような経験がなかったからではないか」⁽¹³⁾

「最終的に満足を得るためには努力の積み重ねが必要

だという現実原則は、幼少期から身をもって一つ一つ繰り返し体験しなければ、身につけられない。そのような体験がなければ、しんきくさい回り道などでははしないだろう」⁽¹³⁾

このことは裏を返せば……。

ほめることは努力を呼び起こし、やがてはその好循環※が困難をも克服させる、ということの意味する。

事業家の青木仁志は、いう。

「成功者は、人の評価が巧みです。じつにさりげなく、相手の良さを見つけて認めることができます。人は認められることで、この人のためにもっと向上しよう、もっと生産性を上げようと思うものです。

人間は認められることで鼓舞され、『さらにこの人の期待に応えたい』と強く思い、やってみようという気になります。それが、つらいことでもやり遂げようとするパワーが溢れ出てくるのです」⁽¹⁸⁾

※好循環……ほめる→努力→賞賛→さらなる努力→激賞→困難をも克服する努力

【ほめ言葉のシャワー 菊池省三先生】

「学級崩壊立て直し請負人」と呼ばれる菊池省三先生。彼は、小学校の崩壊したクラスをつぎつぎと立て直してきた。

菊池先生の学級には、「ほめ言葉のシャワー」という名物がある。

帰りのホームルームで、その日の日直がみんなの前に立つ。すると、ほかの生徒が挙手して立ち上がり、その子のいいところを間髪を容れずにほめる。きちんと理由を添えて。菊池先生自身も、「何気ない仕草やちょっとした表情など、ささいな事までも、きちんと褒める」⁽¹⁹⁾というものである。

ほめ言葉のシャワーを浴びた子どもは、どうなるだろう？

おのずと笑顔がこぼれ、生き生きと輝きだす。なかには、「家では褒められたことがない」と、泣きだす子すらいる。⁽⁹⁾

けっか、子どもたちは、自分の良さに気づき、自信をいさぐ。

さらに、「褒められる→やる気が出る→より褒められたいと思う」という好循環が生まれ、「大人の社会＝公に向かう道筋」ができあがっていくのである。⁽⁹⁾

ほめる側は、どうか。

クラスメイトの良さに気づき、関心をもって注意深く眺めるようになったり、ほめるために表現力を高めていったりする。

菊池先生が、とりわけ、ほめることにこだわるのは、「自信が人を伸ばす」という信念があるから。「自信がないから、友達をいじめたり、教師に反抗的になる」⁽¹⁹⁾のだという。だから、「自信」をもたせることこそが、学級崩壊やいじめをなくす秘けつだと考えている。

菊池先生はいう。

「親が『バカ』『ダメ』といったネガティブな言葉を多用し、その結果、子どもも教室でそういう言葉で仲間を罵るような状況になっている。これを解決するためには、「言葉」しかない。言葉によって子どものコミュニケーション能力を高めるしかない。具体的な方法としては、たとえば『価値語（※菊池先生の造語で、考えや行動をプラスに導く言葉）』を教室に浸透させていくことだ」⁽⁹⁾

そのきっかけとなった出来事が、教員生活9年目の1991年に起きた。

前年度、問題をかかえていたクラスの6年生に自己紹介をさせたところ、一言もしゃべらず、泣き出す子どもが続出。仲間ははずれや嫌がらせが原因で、みんなの顔色ばかりをうかがい、思ったことを口にできなくなっていたのだ。つまり、クラスメイトの目が怖くて泣いていたのである。

そこで、危機感を覚えた菊池先生は、子ども同士を話し合わせるといった取り組みを開始。

すると、その変化は目覚ましく、しだいに声が出るようになっていった。

菊池先生は、話す。

「学級崩壊・いじめは、子どもの学力の問題ではありません。それとは別次元にある。

コミュニケーション能力の不足です。

これにより、お互いを知らない状況が生まれる。お互いを知る方法も知らない。子ども同士で嫌いあうのは、相手のことを知らないからです。興味が無い、知らない。そこで関係が終わってしまうんです。

つまりこの能力の不足により「子どもが安心できない」、そして「自信が持てない」という状況が発生しています。ここから問題が派生していきます。

安心と自信がないから、自分の意見・考え・感情・主張を相手に伝えられない。また相手のそれを受け入れら

れない」⁽⁹⁾

「コミュニケーション能力とは、人間形成に重要な領域なんだ、という意識がまず欠けていた。人間が人間らしく人間とつながっていくための手段として見なされてこなかった。そういう創造的なエネルギーを持つものという認識が今でも欠けています。

これは置き換えるならば『言葉の力』を持つことになる。いじめと戦っていく最大の武器にもなりません」⁽⁹⁾

「子どもではなく、人間を育てなければなりません。そのためには、社会・公^{おおやけ}であるべき自分をめざして成長させるのです。この先、大人としてどうありたいのか。短期的にはどの先生に学んでも大丈夫な子。この先、たとえいじめに遭^あっても言葉の力で立ち向かえる子をつくることを考えます」⁽⁹⁾

そこで、菊池先生は、子どもたちのコミュニケーション能力を育^{はぐく}むために、ディベートを取り入れて大きな成果をあげている。

「ディベートで成長するのは、おとなしめの女子に多い印象があります。意見を発表する時間を与えられ、意見を言う楽しみに目覚めるのです。

それまでの崩壊した学級では、授業の外での関係が授業中の関係も支配していた。活発な男子が、おとなしい女子に対して『うるさい』といえどそこで思考もストップしてしまう。そこで、おとなしい女子は発言をあきらめてしまうのです。

しかし、ディベートは『その人自身と、発表される意見は別』という側面がある。ある時は無作為に『賛成』『反対』とチームを分けますから。だから意見は意見として堂々と言える」⁽⁹⁾

【ほめ方が左右するマインドセット ①】

パーソナリティや社会心理学、発達心理学の世界的研究者であるキャロル・ドゥエック（スタンフォード大学心理学教授）。

彼女によれば、自分の性格（パーソナリティ）と信じているものの多くは、みずからの「マインドセット（心のあり方、考え方、心的傾向）」の産物であるという。そして、自分の可能性を発揮できずにいるなら、原因の多くはここにこそある、と説く。⁽²⁰⁾

それでは、どのようなマインドセットが私たちの可能

性を開花させ、逆につぼみを摘んでしまうのだろう。
ドゥエックは、マインドセットを二つに分類する。

固定マインドセット (fixed mindset)
成長マインドセット (growth mindset)

固定マインドセット (fixed mindset) は、「自分の能力は石版せきばんに刻まれたように固定的で変わらないと信じている」心のあり方。すなわち、知能や人間的資質、徳性も一定であり、変化しないという信念である。

成長マインドセット (growth mindset) は、「人間の基本的資質は努力しだいで伸ばすことができる」と信じている心のあり方。つまり、もって生まれた才能や適性、興味、気質などは、みな一人ひとりちがう。が、努力と経験の蓄積により、だれでもみな大きく可能性を伸ばすことができる、という信念である。*

※ドゥエックによれば、たいていの人は、両方のマインドセットをあわせもつ。そこには無限のグラデーションがあることだろう。しかしここでは話を分かりやすくするために、典型的な両極端を記述する。また、記載されている内容すべてが、必ずしも、そのタイプのすべての人に当てはまるとはかぎらない。

【ほめ方が左右するマインドセット ②】

ほめることが、必ずしも相手のためになるわけではない。

キャロル・ドゥエックによると、ほめ方を誤ると逆効果になることがあるという。

たとえば、たいていの親は、子どもをほめるとき、こんなほめ方をしているのではないだろうか。

- ① 「そんなにはやく覚えられたなんて、あなたはほんとに頭がいいのね！」
- ② 「あの絵をごらん。あの子は将来のピカソじゃないだろうか」
- ③ 「あなたはすごいわ。勉強しなくてもAが取れたんだから」⁽²⁰⁾

けれども、ここには別のメッセージがひそんでいてドゥエックは指摘する。

- ① 「はやく覚えられなければ、頭がよくないんだ」
- ② 「なにかむずかしいものを描こうとしないと、ピカソとは思ってもらえないんだ」

- ③ 「勉強しないほうがいい。さもないと、すごいと思ってもらえない」⁽²⁰⁾

すなわち、先天的な頭の良さや才能をほめると、子どものマインドセットは固定マインドセットになっていく。

このことは、ドゥエックの実験によっても裏づけられる。

彼女は、何百人もの子どもたちを対象に、7回にわたって実験を行った。

すると、頭の良さや才能をほめられた子どもは、学習意欲が損なわれ、ひいては成績も低下したのである。

たしかに、子どもは頭がいいとか才能があるとほめられると、とても喜ぶだろう。

だが、それは長つづきしない。

予期せぬ壁にぶち当たると、それまでの自信は砕け散り、すっかりやる気をなくしてしまうからである。

というのは、固定マインドセットに毒された子どもは、こう思うのだから。

成功するのは賢いからだとすれば、失敗するのは頭が悪いせいだ、と。

こうなると、すぐ完璧にできること以外には手を出そうとしなくなる。結果の正否で自分の価値が決まってしまうと思ひこむからである。

逆にいえば、失敗を恐れて、難しい問題や課題に手をつけようとはしなくなるだろう。

以上のように、親の自慢の種が、子どもの先天的能力や才能だと思わせるほめ方は、リスクが高い。

それならば、なにをほめればいいのかだろう？

後天的なこと。たとえば、勉強や練習を粘り強く頑張ったことや、努力してなしとげたことである。

このことは、直接子どもをほめるばあいにかぎらない。たとえば、子どもの前で、先天的能力や才能の観点から第三者を評価したらどうか。

それを耳にした子どもは、こう思うはず。

「つぎは自分の番か」と。

けっか、子どものマインドセットは、どんどん固定マインドセットに傾いていくことになるだろう。

【ほめ方が左右するマインドセット ③】

キャロル・ドゥエックは、生徒たちをA・B二つのグループに分け、偉大な数学者たちの業績と生涯について、話して聞かせる実験を行った。ただし、話の内容は、つぎのように異なる。⁽²⁰⁾

グループA：やすやすと数学上の発見をした天才だと紹介
グループB：情熱を傾けて数学と取り組んだ末に偉大な発見をしたと紹介

その結果、各グループに、どんな影響をもたらしたろう？

グループA：固定マインドセットに変化
グループB：成長マインドセットに変化

なぜだか。

それぞれの生徒は、つぎのようなメッセージを受け取ったからである。

グループA：「生まれつき数学的能力に優れている人は、何でも簡単にできてしまう。そもそもきみたちとは違うのだ」
グループB：「一生懸命に努力してこそ、技能をみがき、何かを成しとげることができる」

【ほめ方が左右するマインドセット ④】

子どもが、テストや発表を前にして緊張しているとき、どんな言葉をかければ、安心させてあげられるだろう？

たとえば、「あなたは頭が良い(才能がある)のだから、大丈夫」と言ったらどうなるか。

子どもは、「ボロを出したらどうしよう」と、ますます不安な気持ちになってしまうにちがいない。

そんなときは、ドゥエックなら、こんな言葉をかけるという。

「あなたがしっかり勉強(※練習)してることはよくわかってるわ。こつこつと努力を続けているあなたを誇りに思っているのよ」⁽²⁰⁾

【ほめ方が左右するマインドセット ⑤】

子どもが失敗したとき、親はどんなメッセージを送ればいいのだろうか。

たとえば、こんなケースはどうだろう？

9歳の子どものが、はじめての体操競技会に出場した。けれども、入賞を逃し、すっかり落ちこんでしまっている。

あなたが親なら、つぎのうち、子どもにどの言葉をかけるだろうか。

- ①「おまえがいちばんうまいと思う」
- ②「おまえが入賞すべきなのに、判定がおかしい」
- ③「体操で勝とうが負けようが大したことはない」
- ④「おまえには才能があるのだから、次はきっと入賞できる」
- ⑤「おまえには入賞できるだけの力がなかったのだ」⁽²⁰⁾

ドゥエックは、これらに潜む^{ひそ}メッセージを述べている。

- ①親は本心を偽^{いつわ}り、子どもも、そうではないことを自覚している。だから、こんな見え透いた甘言^{かんげん}を吐いても、子どもは、つまずきから立ち直ることも、上達することもできない。
- ②問題を自分に帰さず、他人のせい^{せい}にしている。これでは、自己責任と向きあわず、責任転嫁^{てんか}するような人間にしてしまう恐れがある。
- ③すこしやってみて上手いかないものは、軽んじていいということを教えているようなもの。
- ④これが、いちばん危険なメッセージかもしれない。才能がありさえすれば、望むものがおのずと手にはいるとでもいうのだろうか。それならば、今回、入賞できなかったにもかかわらず、どうしてつぎの競技会で勝てるというのだろうか？
- ⑤一見、冷酷な言葉のように思われるかもしれない。だが、この言葉は、きちんと真実を伝え、そのうえで、失敗からなにを学び、なにをすべきかを示^し唆^さしている。

すなわち、①～④は、大きな問題をはらんでいるといえよう。

その点、⑤は、これだけでは言葉足らずとはいえ、もっとも適切であると考えられる。

【脳科学的根拠】

久保田 競^{きそう} (京都大学名誉教授) は、こう語る。

「ほめられる、というのは、脳にすごく良いのです。ほめられると、中脳皮質^{ちゅうのうのうひしつへんえんけい}辺縁系が働いて快感がともない、物事を積極的にこなす人間になっていきます。ですか

ら、たえずほめて何かをやらせる、自信を持たせてやらせることが大切です」⁽⁰⁷⁾

人は、ほめられると、脳のなかでドーパミンやオピオイドが分泌され、幸福感がもたらされる。

すると、再度、その幸福感を求め、ほめられたいという欲求が芽吹く。

そして、ほめられようと積極的な行動や努力が生みだされることになる。

この好循環のハイウェイに乗ることができれば、人生はどこまでも好転していくにちがいない。

だから、ほめることは、とてつもなく大切なことなのである。

【ほめることは自己価値観と自己愛を高める】

ほめ言葉。

それは中脳皮質辺縁系^{そっこう}を即効刺激する。

ほめること。

それは相手の価値を認め、伝えるための実行手法^{しゅほう}である。

ゆえに、「ほめる」ことは、相手が生きがいを感じ、やる気を高め、よりよく自分自身を愛する（自己価値観を高める）ためにも重要な意味をもつ。

ところが、子どもに対する親や教師の要求水準が高すぎると、ほめることができなくなってしまふ。しかも、子どもが要求をクリアしても、ほめずに要求水準をどんどん引きあげてしまふ大人たちも少なくない。

こうなると、子どもは、期待に応えようと無理に無理を重ね、罰系をたえず刺激することになってしまう。

それでも期待に応えられなかったとしたら……。

自分自身に無力感をいだき（負い目を背負い）、劣等感にさいなまれ、ますます罰系がいたぶられてしまふだろう。

その水圧（プレッシャー）に耐えられなくなれば……。ダムが決壊し、濁流^{だくりゅう}（問題行動、反感、反発など）が噴きだす。

なぜ、子どもを追いつめるほど要求水準が高いのか。

親や教師は言うだろう。

子どもに対する愛情からだ。

だが、逃げ場のないところへ子どもを追いかぶることが、はたして愛情だけに起因^{きいん}していると言いきれるだろうか。

みずからの劣等感や不安の裏返し。見栄、名誉欲^{ぼん}、保身^{ほしん}などの私利私欲。

これらが原因で要求水準が高くなってはいないだろうか。

いちど、心の井戸をのぞいてみよう。

愛する子どものために。

【けなすことは嫌悪や軽蔑、存在価値の否定の間接表現】

相手をけなし、汚い言葉を浴びせかけること。

それは……。

「あなたを愛していない」

「あなたが嫌いだ。軽蔑している」

「あなたには価値がない。いてもいなくてもいい存在だ」

こういう強いメッセージを投げつけているに等しい。

相手が怒らないはずがあるろうか。

私たちが嫌い、憎まないはずがないのである。

そして、私たちがくださった悪い評価は……。

相手の自己価値観に深く浸透^{しんとう}し、それを瓦解^{がかい}させてしまふ恐れがある。

ひるがえって、相手が自分を否定してくるとき、意識的であれ無意識的であれ、自分が相手を否定してしまっているケースが少なくない。けなされた相手は、自分自身の自己価値観を死守^{ししゅ}するために、道理に合おうが合うまいが、こちらを否定してくるだろう。

そして、相手もこちらを、こちらも相手を……。

こんな不毛な悪循環は、どこかで断ち切らなければ、どんどんエスカレートして行って、とり返しのつかない事態をまねきかねない。

「永久に否定ばかりする、永久に反対の態度をとる、永久に同時代者や周囲の者の欠陥と短所に攻撃の矢を放とうと身がまえている、そういうことをするくらいなら、わたしはいつそ首をくくって死んでしまったほうがましだと思う」⁽²²⁾

【ほめることは愛の間接表現】

直接的に、「愛している」と言うことだけが愛の表現ではない。

相手をほめることも間接的な愛の表現であり、「愛している」（「必要としている」、「あなたは価値がある」、「尊敬している」、「大切に思っている」、「あなたは素晴らしい」）というメッセージなのである。

ただし、人をほめるばあい、いちばん大事なものは、言

葉そのものではない。

そこにこめた真心^{まごころ}、おのずとにじみ出る表情（態度）^{こわいろ}や声色なのである。

だから、心の底から発したものでなければ、人の心を動かすことはできない。

それどころか、心にもないことを言えば、信用を失い、逆効果となることさえある。

そこに真の愛があれば、表情や態度は、おのずから明るく生きいきとしたものになるだろう。相手の美点はみずからの喜びともなるのだから。

「私たちが口にするどんな言葉も、心の底から出てくるのでなければ何の役にも立ちません」(マザー・テレサ)⁽²³⁾

「真実、心から出たものでなければ、けっして心に達するものではない」(ゲーテ)⁽²⁴⁾

「愛語^{あいご}※よく廻天^{かいてん}※のちからあることを学すべきなり」(道元)⁽²⁵⁾

※愛語・・・心のこもった温かい言葉をかけること。

※廻天・・・世の中を一変すること。

【賞賛^{しっせき}は叱責^{げきげん}を激減させる】

長所を伸ばせば、短所はおのずと姿を隠す。

叱責が賞賛を増やすのではなく、賞賛こそが叱責を減らしていく。

したがって、効率的かつ効果的なのは、マイナスポイントをつぶしていく教育法ではない。プラスポイントを増やしていく教育法なのである。

また、私たちは、ほめる対象として、努力の結果のみをとらえてしまいがちではないだろうか。

しかし、それではほめる機会はなかなか訪れない。

ほめる機会を格段に増やすためには、努力の過程をもその対象とすることである。しかも、そうすれば、能力の大小^{しやしょう}を捨象し、だれをも平等に評価することができるようになろう。

なお、ほめるばあいでも、すこし塩（注意、忠告、改善点の指摘）をはさむほうが、甘み（賞賛）がきわだつことが少なくない。スイカに塩をふりかけたり、あんに塩を加えたりすると甘みがひきたつように。

その理由はつぎのとおり。

①白に黒をはさむことで、白がきわだつ。

②塩をいれると真実味が増し、甘み（ほめ言葉）がただの社交辞令やご機嫌取りではないと感じられる。

③塩を加えることで、目標を与え、向上心を引きだすこともできる。

④塩が学びとなり、敬意をいただく。

⑤頼もしく感じる。

⑥マンネリを防ぐ。

⑦相手のことを真剣に考えているというメッセージとなるばあいがある。とりわけ、親に愛されていない（かまってもらえない）と感じ、不満をかかえている子どもにおいては。

ただし、さじ加減^{かんじん}が肝心であることは言うまでもない。

【ほめない言い訳】

ほめない人のおもな理由に、「ほめると図に乗って高慢になるから」というものがある。

たしかに、ほめられると自己満足におちいって、努力を怠^{おこた}ったり、調子に乗って増長^{ぞうちよう}したりする人もいるだろう。

だが、それはほめ方に問題があるのではないだろうか。それならば、ほめつつも、ほめるリスクをひき避く^{さくもさく}方策を模索すべきである。

具体的には、ドゥエックの指摘のみならず、つぎのことにも留意^{りゆうい}してはどうだろうか？

①向上心^{かんき}を喚起し、より大きな目標にチャレンジしようとする意欲を引きだす。

②もっと次元^{じゆんざい}の高い動機づけをおこなう。理想的には、動機を「志」のレベルまでひき上げる。たとえば、「私利私欲のため」といった動機が、「他人や社会全体のため」といった動機へと昇華^{しやうか}するよう導く。

③謙虚であることの価値^{かんとく}を感じ得させる。

④過剰にほめすぎない。

というのは、相手が期待に応えようと無理を重ね、結果的に無力感や劣等感にさいなまれてしまう危険性があるのだから。

木に登った子猫が木から下りられなくなるように、ほめるにも、さじ加減やTPOに配慮する必要がある。

【ほめないシンδροーム】

ほめることをかたくなに拒む人がいる。

なぜだろう？

その原因として、本人の劣等感や自信のなさ、優越欲の強さなどもあるのではないだろうか。ほめることは、いっけん尊敬語のごとく、自分より相手を上に置く行為であるように見えるのだから。

だから、ほめることの副作用で、自身の劣等感が刺激されたり、優越欲が満たされず不満を感じたりする人たちもいる。

そうであるなら、ほめられないのは、相手に原因があるからではない。

自分自身にこそ問題があることになろう。

その対処法としては、ほめたとしても、ゆるがない自信を身につけること。優越欲という利己心を克服することである。

「なぜこう悪口が絶えないのか。人々は、他人のちょっとした功績でも認めると、自分の品位を損ずるように思っている」(ゲーテ)⁽²¹⁾

【賞賛の種をまく】

直接的にほめられるより、間接的にほめられるほうが、自己価値観を高めるのにより効果的であることが多い。間接的であるほうが、美名がまわりに広まって、第三者からも評価されることにつながる。また、間接的な評価のほうが、虚偽性(絵空事、嘘も方便、白々しいリップサービス、社交辞令)や「ほめることによって気に入られよう」といった功利性(打算、空世辞、おべっか)が希薄であるため、言葉の真実味がいっそう増すからである。

同じく、悪口も直接いうより、伝え聞くほうが悪影響はずっと大きい。

なぜなら、一対一での悪口は、自分だけの狭い範囲にとどまるが、陰口は広範囲に悪影響をおよぼす。

また、陰言のほうが真実味をもつ。

さらに、直接いわれた悪言は善意の諫言である可能性

を残す。が、通常、隠れ言は悪意から発するものだからである。

私たちは、賞賛の種をまくことに心をつくそう。悪口を言う暇がないほどに。

【承認(敬意、尊重)は心を開く魔法のカギ】

1995年3月20日、サリンという化学兵器を使った無差別テロ『地下鉄サリン事件』が発生。死者13名、負傷者6300人以上という大惨事となった。

警察は、オウム真理教の仕業にちがいないとらむ。

が、いまでも決定的証拠をつかめないでいた。

そんな忸怩たる状況のなか、4月23日、教団ナンバー2で、科学部門のトップであった村井秀夫が、公衆の面前で刺殺されるというショッキングな事件が起きる。

このまま、真相が闇から闇に葬られてしまうのではないか……。

いや、それどころか、あらたなテロが襲来するのでは?!

不安と震撼の暗雲が日本全体を渦巻く。

この切迫した状況を打開したのは、ある男の全面供だった。

林郁夫。人命を救う高名な心臓外科医にして、人命を奪うサリン散布の実行犯だった。

どうして彼はすべてを話す気になったのだろうか？

取り調べをおこなったのは、機動捜査隊からかりだされていた稲富功だった。

捜査一課の取調官が担当しなかったのは、事件の重要人物とみなされていなかったからである。

しかし、暴力団などの組織犯罪を担当してきた稲富は、彼のなかに組織犯罪の闇を感じ取っていたのだった。

稲富はひとつの確信をもって取り調べに臨む。

林は、かならず、「かつての気持ちを思い起こすはずだ」⁽²⁶⁾。

そのため、稲富はみずからはもとより、留置所の看守にも「先生」と呼ぶよう徹底させたのである。

すると、林は稲富にいった。

「先生という呼び方はやめてほしい。私はもう医師ではない。そんなふうに思われるのは面はゆい」⁽²⁶⁾

それでも稲富は、きっぱり答えた。

「実際にあなたは人の命を救ってきた。立派な仕事を

されてきたので敬意を込めて呼ばせてもらいます」⁽²⁶⁾

そのうえで、オウムや地下鉄サリン事件にはあえて触れなかった。

ただ、昔を思い起こさせる話を交わしていったのである。

けっか、林はしだいにかつての自分を取りもどしていく。

そしてついに、林は、「私がサリンを撒きました」⁽²⁶⁾ と言って、洗いざらし供述を始めたのである。

林の自白を得た警察は、10日後の1995年5月16日。オウム真理教の教団施設を強制捜査する。あげく、札束をかかえ、隠し部屋にかくれていた麻原彰晃を、地下鉄サリン事件の首謀者として挙げたのだった。

【メーデル・メーデル】

マザー・テレサは、せつせつと訴える。

「子どもたちは、彼らを受け入れ、彼らを愛して、彼らをほめ、彼らを誇りとしてくれるだれかを熱望しているのです。子どもたちを、私たちの注意や関心の中心にもう一度戻そうではありませんか。こうすることが、唯一私たちの世界が生き延びる道なのです。なぜなら、子どもたちは未来への唯一の希望だからです」⁽²⁷⁾

「あなたのごく近くに、愛情と優しさに飢えている人々が、きつといます。どうぞその人たちを見捨てないでください。彼らに人間としての尊厳を認め、あなたにとって大切な人たちなのだ、真心を込めて認めてやってください」⁽²⁸⁾

世間から見捨てられ、蔑まれ、そして人間扱いされてこなかった貧しい人びと。マザーは、彼らのなかにすばらしい価値を発見し、人間としての誇りをとりもどすお手伝いをしてきた。

私たちも、まわりの子どもたちのなかに、美しい価値を発見し、愛し、育んでいこう。「愛でる」ことが「芽出でる」ことにつながるのだから。

【ほめる効果は尊敬の大きさに比例する】

軽蔑している人からの賞賛と、尊敬（敬愛）している人からの賞賛。

同じ賞辞でも、その影響力には雲泥の差がある。

前者は、かえって反発をまねき、やる気を失わせる恐

れがあろう。

たほう、後者ならば、なんとほめようとも、その回数と効力が反比例するのではないかと気にする必要はない。

すなわち、ほめる効果は、ほめる人への尊敬（好感）の大きさに比例する。

したがって、称賛が大きな効力をもつためには、ほめる人自身が、相手との関係を良好にたもち、尊敬に値する生き方をしていることが大前提となるにちがいない。

【「すみません」と「ありがとう」】

日本人はよく、「ありがとう」と言うべき場面で、「すみません」と口にする。

この言葉は、本来、自己の非を詫げる消極的な言葉である。

また、「すみません」という言葉は、相手の価値を認めて高く評価するという積極的な力が弱い。これでは、互いの心理的距離が縮まらず、自他合一（自他融合）という愛の関係を築くことは難しいであろう。

これに対し、「ありがとう」という言葉は、互いの心の扉を開かせ、相手の価値を認めて高く評価するという積極的な力をもっている。この魔法のことは、愛の関係を構築するうえで、大きな力を発揮するにちがいない。

口癖になるくらい「ありがとう」の言葉を発しよう。

そうすれば、まわりの人たちも、「ありがとう」を口にするに抵抗がなくなり、「ありがとう」の輪がどんどん広がっていく。やがて、その輪は大輪となり、美しい親愛の花を咲かせるだろう。

【感謝の念が左右する未来像】

「やってもらうのは当たり前」

「ただ勝手にやっているだけ」

こう平然とうそぶく人がある。

のみならず、親切をうけるほど、ごう慢かつわがままになっていく。

すると相手は、「してあげたい」という気持ちがそれだけ薄れ、ときには怒りを覚えることもあるだろう。これではすべてが悪循環に飲みこまれてしまう。

逆に、感謝を知る人は、親切を受けるほど、ますます感謝の念を深くし、謙虚になっていく。

相手も、それに感謝し、「また喜ばせてあげたい」という気持ちが芽生える。

こうして感謝の好循環ができていく。

感謝の念をもつことは、自他ともに喜ばしいことなのである。

【感謝と称賛の共通性】

「感謝する」ことも、愛を贈り、自己価値観を高める行為であり、「ほめる」ことと同一の作用をもつ。

安保徹（元新潟大学大学院医学部教授）によれば、人は「感謝する」と、副交感神経が優位となり、より健康的になる。感謝の気持ちを口にすると、より効果的であるという。⁽²⁹⁾

他人からほめられない、感謝されないという人は、まず、自分が他人をほめ、感謝することから始めてみてはどうだろう。与えることは、与えられることでもあるのだから。

このような好循環は、自己価値観と愛されているという意識を高めあい、愛の足場を固めてくれよう。

【感謝の心は社会性を 育む】

人間は、ひとりで「人間」になれるものではなく、ひとりで大人になれるものでもない。

親兄弟や祖父母をはじめ、まわりから支えられ（生かされ）、やがては支えていくべき存在なのである。

私たちは、どれほどまわりの人たちからお世話になり、大きな恩恵を受けていることであろう。このことを深く悟ったならば、感無量の感謝の気持ちがあふれ、幸せを実感して生きていくことができるにちがいない。これこそが、社会内存在である人間のあるべき姿なのではないだろうか。

たとえば、親（祖父母）が、どれほど自分を慈しみ、無償の愛をそそいでくれたのか、ということの底から実感できたらどうだろう。感謝の念がふつふつと、とめどもなく湧きでてくるはずである。そして、自分を大切に生きる生き方を選択し、その恩に報いようと切に願うのではないだろうか。たとえば、「真剣に生きたい」、「立派な社会人となって親を喜ばせたい」というように。

つまり、親の無償の愛に感謝することは、自分を大切に、向上心をもって、社会的責任ある生き方へとのおのずから人を導いていく。

これは、すべての人間関係にもあてはまる。

まわりの人びとばかりではない。

私たちが、今日の世界を享受して生きていくことができるのは、先人たちの血のにじむような、ときには命をかけた尽力の賜物なのである。そういう目に見えない愛によって支えられ、生かされていることを自覚し、

日々感謝して生きよう。

あらゆることに感謝し、「ありがとう」という言葉がいつも飛びかう光景。

それこそが本来の姿ではないだろうか。

引用文献

- (01) 広口正之. シンギュラリティとは～2045年問題～. (2014.3). JNSAPress. (https://www.jnsa.org/jnsapress/vol37/2_kikou.pdf). (2021.1.11 取得).
- (02) シンギュラリティとは？技術の特異点をもたらす2045年問題を解説. (2019.8/1). パーソルテクノロジースタッフ. (https://persol-tech-s.co.jp/hatalabo/mono_engineer/495.html). (2021.1.11 取得).
- (03) 藤原和博. (2017.2.9). 10年後、君に仕事はあるのか？. ダイヤモンド社.
- (04) 藤原和博. (2015.8.22). 藤原和博さん これからの子供に求められる力って何ですか？. ダイヤモンド社. 週刊ダイヤモンド, 103(32) : 30-33.
- (05) クライアントに人気のロゴデザイナー、実はAIだった件（ロシア）. (2020.9.21). ガラパイア. (<http://karapaia.com/archives/52294809.html>). (2021.1.5 取得).
- (06) 文部科学省. (2016.3.31). 高大接続システム改革会議「最終報告」. (https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232_01_2.pdf). (2021.1.10 取得).
- (07) 久保田競. (2006.4). バカはなおせる 脳を鍛える習慣、悪くする習慣. アスキー.
- (08) 川村則之. (1999.2.1). プラス思考だけじゃダメなんだ！サンマーク出版.
- (09) 菊池省三／吉崎エイジーニョ 編. (2013.6.30). 学級崩壊立て直し請負人. 新潮社.
- (10) プロフェッショナル 仕事の流儀／小学校教師 菊池省三の仕事／未来をつかむ、勝負の教室. (2012.7.16). NHK エンタープライズ.
- (11) [特集]「この15歳」を生んだ家庭 板橋・両親殺害「信心が足りない」が引き金だった「創価学会三代」の惨劇. (2005.7.7). 新潮社. 週刊新潮, 50(26) : 28-30.
- (12) 板橋の両親殺害 長男に懲役14年「父と理解し合えたら」相談相手なく爆発. (2007.12.2). 北海道新聞, 37 : 1-5.

- (13) 片田珠美. (2009.5.25). 無差別殺人の精神分析. 新潮社.
- (14) 山口良治. (1998.2). 信は力なり 可能性の限界に挑む. 旬報社.
- (15) 茂木健一郎&NHK「プロフェッショナル」制作班編. (2007.12). プロフェッショナル仕事の流儀 勝負の決断はこうして下せ. NHK 出版.
- (16) 部下を大声で怒鳴る 栃木県警が署長を更迭. (2011.10.25). 産経ニュース. (<http://sankei.jp.msn.com/affairs/news/111025/crm11102519440035-n1.htm>). (2011.10.25 取得).
- (17) さだまさし. (2015.10.14). さだ語録. 株式会社セブン&アイ出版.
- (18) 青木仁志. (2012.10.1). 目標達成の技術. アチーブメント出版株式会社.
- (19) プロフェッショナル 仕事の流儀／小学校教師 菊池省三の仕事／未来をつかむ, 勝負の教室. NHK. (<http://www.nhk.or.jp/professional/2012/0716/>). (2015.10.31 取得).
- (20) キャロル・ドゥエック／今西康子 訳. (2008.11.1). 「やればできる!」の研究. 草思社.
- (21) Johann Wolfgang von Goethe /高橋健二 訳. (1952.6). ゲーテ格言集. 新潮社.
- (22) 手塚富雄. (1968.8). いきいきと生きよ ゲーテに学ぶ. 講談社.
- (23) Mother Teresa. Edited by Georges Gorrée & Jean Barbier / 支倉寿子 訳. (1982.12). マザー・テレサ 愛を語る. 日本教文社.
- (24) Johann Wolfgang von Goethe /手塚富雄 訳. (1975.2). ファウスト 悲劇第二部. 中央公論社.
- (25) 道元. (1993.4). 正法眼蔵 (四). 岩波書店.
- (26) 直撃!シンソウ坂上. (2018.7.12). 「先生…」この呼び方が, 林郁夫をオウム真理教から人間に戻した. (<https://www.fnn.jp/posts/00335230HDK>). (2018.7.27 取得).
- (27) Mother Teresa / Edited by Jaya Chaliha & Edward Le Joly / いなます みかこ 訳. (2000.6). マザー・テレサ 日々のことば. 女子パウロ会.
- (28) Mother Teresa. Edited by José Luis González & Balado / 渡辺和子 訳. (1997.2). マザー・テレサ 愛と祈りのことば. PHP 研究所.
- (29) 安保徹. (2008.11). 病気になる免疫のしくみ. ナツメ社.

参考文献

- 齋藤元章. (2015.1.8). エクサスケールの衝撃. エヴリ・シンク.
- 野村直之. (2016.11.15). 人工知能が変える仕事の未来. 日本経済新聞出版社.
- 藤原和博. (2013.9.12). 藤原和博の必ず食える1%の人になる方法. 東洋経済新報社.
- 山中伸弥 / 羽生善治. (2018.2.13). 人間の未来 AIの未来. 講談社.
- 新井紀子. (2019.9.19). AIに負けない子どもを育てる. 東洋経済新報社.
- 井上健悟, 林哲矢, 宮本夏実. (2018.5.12). AIに勝つ子 負ける子 / 週刊東洋経済 e ビジネス新書 NO.265. 東洋経済新報社.
- 大西可奈子. (2018.3.28). いちばんやさしいAI〈人工知能〉超入門. マイナビ出版.
- 藤木俊明. (2017.7.11). マンガでわかる人工知能. インプレス.
- 中原圭介. (2018.11.8). AI×人口減少 これから日本で何が起ころのか. 東洋経済新報社.

Scolding education and complimenting education

ENDOHI Hitoshi

Abstract

An educational method of scolding, and that of not scolding.

Which is correct?

This issue has often been discussed.

However, this treatise considers this issue from the perspective of brain science, not from the perspective of scolding or not scolding.

Next, we consider the risk that praise sometimes leads the child (student) to the wrong direction (pitching).

Finally, we consider the methods of compliments that promote the potential of children (students) and the importance of compliments.

